
肩重い『被験者、山田 花子の場合』

アッピ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

肩重い『被験者、山田 花子の場合』

【Nコード】

N86830

【作者名】

アッピ

【あらすじ】

三十路を迎える女性の恋模様。

人生、山あり谷ありみたいな経験を、山田 花子という女性を通して表現した作品です。

《第一章、山田 花子の自己啓発セミナー》

私の名前は『山田 花子』。

何の因果か、親のネーミングセンスの無さが原因なのかは分からないが、これが私の名前。

名前の枠組みで、日本でもっとも有名な部類に入と思う。

数え切れない程いる歴史上の人物や、著名な有名人、そんな人達よりも私の名前の浸透率が高い。

例えば、常識問題で、

「この日本に置いて、色々なケースで、モデルネームとして使われる女性の名前は何でしょう？」

といった問題が出されたとする。

それを100人の解答者が答えた場合、八割近くの人が答える事が出来ると思う。

私の名前はそれ程に、この日本においてはポピュラーな名前になっている。

私は、この名前の事でイジメられた経験が無い。

こうやって振り返ってみてもラッキーだったなと思える。

『山田 花子』

自然に溢れたこの名前、和心の結晶だと私は自負している。

そんな私も、29歳の誕生日を終えてしまった。
来年には三十路を迎えてしまう。

世間では、『三十路』という立派な線引きで差別化されてしまっているけど、私はそんなに悲観していない。
女のよさが際立つのは30からだと思っっているから。
むしろ、Welcomeと思う気持ちの方が強い。

オフコースは、こんな三十路を迎える女性の為に歌ってくれたんだ
って私は思っている。

『大人の階段昇る、君はまだシンデレラっさ．．．』
この歌詞は、三十路を迎える女性の応援歌に思える。

私はSelfでキャッチコピーを作った。

『Love Holic』

恋愛中毒。恋愛ジャンキー。
これが私のキャッチコピー。

私自身の事を的確に表現出来ていると思っている。
恋愛映画のヒロインになりきる癖がある。

私はこんな自分が大好きだ。
だから、こんなキャッチコピーを付けたんだと思う。

私は恋愛という毒に、全身を侵されている。

この毒を消す血清は、運命の王子様が持っている。

私はこの29年間、その事を信じて疑わず生きてきた。

三度の飯よりも、私は一夜の熱い恋の方がお腹一杯になれる。

365日、24/7。

私は呼吸をする数と、恋患いを比例させていたい。

どんな瞬間でも、血が通い、体が火照り続ける限り、私は恋に溺れていたい。

これは、キャッチコピーでもあり、モットー。

恋は私をダメにし、強くする。

言わば、ロールプレイングゲームと同じ。

経験値を上げ、レベルアップしていく。

最終的には、私を『Love Holic』という呪いにかけて愛し
の大王に立ち向かう。

見事、彼のハートを射ぬき、彼のハートを手に入れる事でこのゲー

ムは終わりを迎える。

エンディングはその後の幸せな二人。だけど、これは誰にも見せない。私達だけのものだから。いつか絶対にエンディングを迎えてやる。これが私の今の目標。

『妄想だと恋愛やり放題。』

これはママからのアドバイスだった。

「考えるだけは無料だし、誰にも迷惑かけないから、好きなだけ恋愛しなさい。

頭の中で。」

我が母ながら、感服してしまう。

これを言われた13歳の頃は、思春期だったし反抗的で、この言葉に嫌悪感を抱いていた。

当時は、妄想よりもRealityを求めていたから、この言葉は私には届いていなかった。

だけど、この歳になると、勿論Realityも欲しいけど、どこ

か妄想じゃないと満たされない部分が出てくる。
経験が裏目に出てくる感じで。

私はその典型的なタイプになってしまった。

数多くの、色々なジャンルのMen's達。

彼らに出会い、恋した事が、今の私を作り上げた。

恋愛物のDVDを借り漁り、夜な夜な、お酒と自分に酔い、映画の主人公に同化する。

そして、新たな恋への期待と、理想を膨らませる。

一言で感想を言うなら、

「妄想最高!」

これが、私が29年間で学んだ恋愛哲学。

そろそろ、現実世界に目を向け、久しぶりに、妄想世界と現実世界のLinkを試みようと考えている。

『他力本願』。

これが私の座右の銘。

今までの恋愛経験がその事を物語っている。

初めて出来た彼氏、名前は『谷口 敦彦』。
高校一年の夏だった。

人生で初めて経験した合コン？で出会った。

実際は合コンと言える内容ではなく、まだ垢抜けていないBoys
& amp; Girlsが、お互いを牽制しながら、張り詰めた空気
の中でカラオケをして過ごすというものだった。

この合コンを仕掛けたのは彼だった。

そんな彼の第一印象は強烈で、今でもはっきりと覚えている。

『ありっちゃ、あり。』

彼は左足を骨折していて、松葉杖を突きながらの参加だった。

カラオケが入っている、複合施設の一階ロビー。
そこが待ち合わせ場所。

私達は4人。

ここに来る前に、駅のトイレで、覚えたてのメイクを頑張ったのを

覚えている。

それぞれが鏡に向かい、一斉にメイクを始めた。

親友の愛は、ナチュラル派だから殆どメイクはしなかったけど、私を含めた3人はメイクに没頭していた。

メイクの出来は散々だった。

私達が持ち合った雑誌からの俄か知識では、メイクの真髄を理解出来ておらず、焼石に水状態だった。

メンバーの一人、香織は、シャドーの案配が分からず、ヴィジュアル系になっていた。

もう一人のメンバーの、恵に至っては、お母さんから借りてきた真っ赤なルージュが、想像以上に真っ赤で、唇が腫れてしまったかのようにになっていた。

そして、私。

チークに力を入れていたら、お多福さんみたいに頬が赤く染まってしまった。

だけど、結果的には、このチークのお陰で、私は顔が赤くなるのを悟られずに済んだ。

私達は盲目だった。

メイクをしたという充実感に捕われ、メイクの出来栄を無視してしまっていた。

「花子のチークの乗り具合、マリー・アントワネットみたいで可愛い」

香織が仕掛けだした。

「そんな事ないよ。

香織なんて目力MAXじゃん！

恵の唇なんて、真つ赤で今にもキスしたいもん」

馬鹿な私も同調した。

「止めてよ。

これは今から会う、運命の人のためなんだから！愛はいいよね、ナチュラルでも可愛いから」

波及効果が出だした。

「きゃーっ。

恵イケイケじゃん！

皆可愛いよ」

勿論、愛も参戦。

こうやって、馬鹿な私達の誉め合いは、5分にも及んだ。

運命の時は、刻々と近いてきた。

全面硝子張りになっている入口の先、4人組みの男子高校が見えた。

「来たあ
♪」

この恵の一声で、皆のボルテージは上がった。

いざ、決戦に挑まん。

それが私達の合言葉だった。

戦場になったカラオケ。

広さ、内装、サウンドシステム、ともに普通。
いわゆる、オーソドックスなタイプのカラオケルームだった。

初めての合コン。

私は、自分で想像していたよりも毅然としていて落ち着いていた。

はじめましての挨拶も無難にこなせたし、ドリンク注文も率先してやれている。

私は合コンの雰囲気呑まれてしまうのではと危惧していたけれど、実際は私がこの場を飲み込んでいるといっても過言ではなかった。

Boys & Girls は、相変わらずお互いを牽制し合って、自分達のコミュニティーからは出ようとはしない。

さっきまではテンションが高かった恵達の面影は、今となっては全く無くなってしまっている。

その時に感じた事を今でも覚えている。

「あつ、やっぱり私って皆と違う存在なんだ。」

皆がお子ちゃまに見えてしまい、どうしても上から見てしまう自分

を否定したい気持ちもあったけど、これが現実なんだあ、と自分自身に納得してしまった、山田 花子 15の夏。

というのは大嘘。

一連の流れはこの通りだったが、実際の私の心情は180度異なっていた。

一番最初の出会いの瞬間、M e n · sを一目見たあの時から私の脳のリミッターは飛んでいた。

M e n · sが、

「お待たせしました。
かなり待たせたんじゃないですか？
本当にごめんなさい。」

すると恵が、

「そんな事ないですよ。私達も3分前に着いたばかりだからねっ、花子？」

予想だにしていなかった、このタイミングでのスループス。

（恵、私決めてんだよ。

私が口を開くのは自己紹介の時だって決めてたんだよ。

ねえ、恵…？）

と、私は斜め前に立っているFantajisutaに念を送っていた。

今となって考えると、たいしたことではないと思う。

ただ、「うん。」と言うだけで回避できたわけだから。

当時の私、あの場の緊張感を踏まえて考えてみると、あの時の私には、その場を乗り切るだけの回避能力は備わっていなかった。

「そうなんですよ。
最近便秘気味で、私がずっとトイレに入ってたからこんな時間にな
ってしまっただんです。」

…。

M e n · s、笑いのわの字も出ず F r e e z e。

G i r l · s、瞳孔開いて B u r n i n g。

そして私。

割腹自殺で G o T o H e v e n。

自分でも不思議だった。

どうしてあんな事を言ってしまったのか。

便秘というのは真っ赤な嘘。

事実無根もいいところ。

実際の私は、女性の中では、快便の部類に入るはずだから。

何故あのタイミングで、嘘をつき、便秘といった恥辱的な方向性を持っていたってしまったのだろうか。

この件に関しては、私の中でも未だ謎となっている。

あの後すぐに部屋に入った。

皆、あの場を上手く乗り切れる術を持っておらず、無かった事にするという選択肢を選んだのだ。

この時点で、私と皆との間には温度差が生まれてしまっていた。

皆は、心地いい緊張感のぬるま湯に浸かっていたが、私は既にパニックタイムに突入していた。

当時は理解できていなかった言葉がある。

『ときめき』

ママが小6の時に教えてくれた言葉。

「ときめきi sライフ」

当時の私は全く理解出来ていなかった。

この合コンの席でもその言葉を私は理解出来ていなかった。ただ、私の人生の中で、「ときめきi sライフ」を初めて感じたのはこの時だったのを覚えている。

ママ。

ママの言う事は、いつも先を行ってるね。

私はその時、改めて母の偉大さを知ったのだった。

私にとって、母は偉大な人物。

数々の名言を残してくれている。

そんな母の言葉を胸に秘め、私は、緊張という名の糸と、様々な思惑の糸が交差した蜘蛛の巣、その場で抗う事を心に固く誓ったのだ

った。

皆、構えてしまっている。

これは皆にいえる事なのだが、未知の領域に踏み入れた時というのは、このようになってしまうものなのだと思う。

それが、アポロ11号の月面着陸でも、アマゾンの未開の地への潜入でも、合コンでも変わらないのではないかという事を感じた。

何のActionも起こらないまま、時間だけが過ぎていつてしまった。

タイムリミットは残り1時間。

カラオケの時間の終わりは、必然的にこの合コンの終焉を示していた。

相変わらず、皆、順番でカラオケを歌うか、それぞれのCommunityだけで盛り上げている。

B・Z、L・Arc・en・Ciel、JUDY AND MARY、Coocoなどと次々に曲が過ぎていく。

そんな中、先陣を切った男ひとがいた。

敦彦君だった。

敦彦君は、それまでは、一人、歌も歌わずに沈黙を守っていた。そんな彼が、急に動きだした。

この時はまだ、彼には「ときめき」を感じていなかった。

曲が途切れ、マイクを握った敦彦君。

「あつ、あつ、あ。」

えっと、俺も合コンがどんな事をする場なのかは知らないけど、これじゃダメだと思います。

せっかく出会ったわけだし、残り1時間、もっと話しませんか？」

敦彦君も緊張していたんだと思う。

空中を見つめ、そして全てが棒読みになってしまっていたから。

敦彦君のこの勇氣。

この勇氣がこの場を変えた。

今まで敬遠しあっていた Mess & Girl's は、隔たっていた一枚の硝子の壁を破る事に成功したのだから。

今までの、モジモジ、モゾモゾは一切見られなくなった。

私は思った。

敦彦君のこの功績は大きいと。

今までとは雰囲気が変わり、歌う人間はいなくなった。

テーブルを挟んでだが、皆がそれぞれの話題で盛り上げている。

出身中学の話、共通の知り合いの話、恋愛感など。

本当に、皆が楽しそうにそれぞれの時間を過ごしている。

私は、ソファアの上に体操座りになり、そんな皆の姿を眺めていた。
私はこうやって過ごす事が心地よく感じてしまう人種なのだ。

楽しむ皆をよそに、敦彦君は独りで過ごしている。

視線の先にいる敦彦君。

敦彦君は対角線上に座っている。

見えているのは横顔。

テーブルに肘をつき、皆のことを眺めている。

私は思った。

敦彦君は私と同じ人種なのではないかと。

何だろう…？

私はこの時感じたんだ。

特別な感情を。

この時は、それが完全な形にはなっていなかったから、自分でもよく分かっていなかった。

私は、敦彦君に興味が湧いたという気持ちだけは確信が持てた。

だから、話してみたいと思った。

私が立ち上がった時、

「ねえねえ、花子。

聞いてよ。

斉藤君もC o o c o 好きなんだって。

男の子で好きな人って珍しいよね？

斉藤君ってきちよおう！！」

またまた間が悪い恵に話しかけられ、私は敦彦君に話しかけるタイミングを逃した。

そして、そのまま時間は過ぎ、この場は終わりを迎えた。

結局、私は恵と斉藤君に捕まり、最後まで敦彦君とは話す事が出来なかった。

恵達と話しながらも、私の視界の中には、常に敦彦君が写っていた。

話せなかったというFrustration。

それに、あの時から感じていたFeeling。

この2つが、時間の経過とともに、私の内側でジワジワとドッキングしていき、忘れていた、あのPanic Timeが訪れてしまっていた。

「これからどうする？」

っていうか、こんな時間？

じゃあ、今日は解散ということだ。

また改めて遊ぶということでもいいかなっ…。

それでいいと思う人お？

1、2、3、4…。

皆だねっ。」

恵がこの場を締めている。

「花子お、決まったよお。

今日は帰るってことで。

…。

ねえねえ、聞いているの？

…。

どうしたの…？

花子、具合でも悪いの？」

ママ、やっと分かったよ。

これが『ときめき』なんだね。

『ときめきi s ライフ』

うん。

私、生きてる。

感じる。

このドキドキ感。

そうだね。

ときめいてるっていうのは、生きてるって事を目一杯感じれるんだね。

「敦彦君。

…。

この後、少し話しませんか？

というか、付き合ってください。」

「あつ。」

言った瞬間、我に還り、私は顔を赤目、その場から動けなくなってしまった。

時が止まった。

その場にいた、皆の時間が止まった。

一斉に、私は皆の注目を浴びる事になり、皆がざわめきだした。

私自身、「付き合ってください」という言葉には戸惑っていた。それは、私のPlanには含まれていなかったから。

私の本能が、無意識的にあの言葉を言わせていたと思う。

恵は私に何か言いたそうにしていたけれど、その場の空気に吞まれてしまい自重していた。

少し間が空き、皆の注目は、私から敦彦君へとSwitchしていた。

この時も、私は恥ずかしくて、顔を上げる事が出来なかった。

皆はただ待っている。

敦彦君の答えを。

今、この場の静寂を崩す事が出来るのは敦彦君だけ。

「あつ…。

えつと…。

いやっ…。

はい…。」

答えが出た。

だけど、誰も喋らない。

さっきは、私の言葉に固まっていたこの場は、敦彦君の答えに固まってしまっている。

皆考えていたと思う。

可能性は0ではないが、この場でOKが出ることはないだろう。

元々面識もなく、ましてや会話もない2人がどうやって付き合うところに辿りつくのか。

何の脈絡もなく、恋愛関係が成立するわけがないと。

敦彦君は、私を含めた皆の予想外の答えをもたらしたのだった。

人生初の合コンは、このような結果になり、お開きとなった。

それぞれが、違和感を抱えたまま家路につく中、私達はその場に残

り、改めて出会いを楽しんだ。

あれから二ヶ月。

私に初めて出来た彼氏。

谷口 敦彦君。

一瞬で火がついたこの関係も、蝋燭が熔け終わるように、短い関係で終わってしまった。

恵からは、

「所詮、勢いの恋愛はこんなもんじゃない？」

なんて言われたけど、私は、あの二ヶ月間は、手探りながらも、自分なりに本気で恋愛していたと自負している。

敦彦君。

彼の大きな思い出は、First Kissの相手だったということ。

今の私があるのも、敦彦君が礎になっているからだと思う。

ありがとう、敦彦君。

こうして、私の最初の恋愛は終わった。

そして、私の男性遍歴はここから始まるのだった。

《第二章、山田 花子の男性遍歴》

敦彦君との恋の終焉から3ヶ月。

3日3晩泣いていたあの私の姿は、3ヶ月経った今、私の中から完全に消え去ってしまった。

今思うと、人はどんな事柄においても、実際に経験しないことには学ぶ事は出来ないんだなと感じている。

例えば、知識が豊富で、恋愛選手権にentryして、そこで優勝を手にした恋愛知識masterと呼ばれる男が存在したと仮定する。

名前は木村〓M〓拓哉（仮）。

容姿は端麗^{たんれい}、頭脳は明晰^{めいせき}。

世の男性の中でトップクラスの男。

ただし、恋愛経験無し。

勿論、童貞。

女性に触れた経験は、小学校の入学式の時と、小学校3年生の遠足の時に手を繋いだ経験が2回だけ。

そんなmasterに対抗するのは、一般people代表のこの私。

私に知識なんてない。

私にあるのは昔とったきねづか、もとい苦い失恋経験が1度のみ。

舞台は実戦形式の恋愛battle。

持ち時間無制限。

癒着、ゆちゃく賄賂、わいろ猥褻わいせつ以外OKの無差別勝負。

…。

……。

L a d y F i g h t

C
a
n
c
a
n

C
a
n
c
a
n
。

∴。

3
秒。

2
秒。

1
秒。

4、23秒。

1度の失恋 妄想癖の童貞固め。

Winner 山田 花子

ウワァー…………。

ピュッ、ピュー（指笛）

みたいな感じで、解説も挟まずの秒殺。

少し脱線したけど、結局私が言いたかったことは、最初に言った、経験こそが全てだという事。

どんなに知識があっても、それはオママゴトの延長線の恋にすら勝つ事は出来ないという事。

私が敦彦君との恋、失恋を経験を通して学んだことがこの結果だった。

あれから10数年。

気付いたら、独身のまま三十路を迎えようとしている。

20歳前後までは、誰よりも結婚願望が強かった私だから、それを知っている周りの人達はこんな私に気を使ってくれるけど、私は一切悲観などしていない。

過去に幸せを置いてきてしまったわけではないし、先の事を想像すると、30年分の幸せが、近い未来やってくるのではないかと思えて仕方がないからなのだ。

この私の positive thinkingが、この先どういう結果をもたらすのかという事は、蓋を開けてみないことには分からないということとは楽しみな事だ。

私は様々な経験をし、失敗を繰り返したから今の私があるのだと思っっている。

この失敗というのは、一見、言葉の通りに捉えてしまいそうになるが、私から言わせてみれば貯金みたいなもの。

失敗を重ねることは、積み立て貯金をしている事と何ら変わらないのだと思う。

私は30年間分の失敗を貯金してきたわけだから、それが満期を迎え、幸せのstock開放を行うと考えてしまったら、私はそれを想像しただけで身震いが止まらなくなってしまうそうになる。

想像以上の幸福が訪れ、私は押し潰されて死んでしまうのではないかと恐くなってしまっただ。

恋と愛、そして恋愛のこの3つの違いを、分かっているようで分かっていない私には、まだまだ積み立てを続ける日々が続くそう。

『恋』、『愛』、『恋愛』。

一見同じように思えるが、私の中では別のもの。

私の中で、勝手に位置付けを決めている。

『恋』 < 『恋愛』 < 『愛』

世の中の人々がどのように考えているのかは分からないが、私の中で

はこのような位置付けになっている。

何度も出てくる、敦彦君との関係においては、正確に言うと『恋』だったと思う。

当時の私には『恋愛』という概念が備わっていなかったから、私には『恋』と『恋愛』の違いが分からなかった。
あれから、『恋』と『恋愛』は数多く経験した。

いい『恋』も経験したし、うーん…と思うような『恋』も経験した。

だけど、その中で、『愛』と呼べるものは1つしか存在していない。

その時は『愛』だと感じたものも、時間が経ち、振り返って考えてみると、『恋愛』に収まってしまう。

幾つもの『愛』を重ねていっても、過去の『愛』は、私の中で『恋愛』以下に変わり、結果的には『愛』は1つだけ存在することになってしまう。

その結果を踏まえると、今現在、『愛』だったと感じている想い出も、次の『愛』を見つけてしまった時には『恋愛』以下の想い出に変わってしまうのではないかと思っている。

そんな事を考えてしまうと、複雑な気持ちになる。というのが私の本音だ。

真実の『愛』、果たしてそれが結婚という形で表現されるものなのかなということを考えると、どこか違和感を感じてしまう。

30年近く生きてきた私だが、『愛』という言葉が、私が持ち合わせている認識の枠組みの中に収まりきれていない。ということを、最近強く感じてしまう。

『恋』に落ち

『恋愛』に浸り

『愛』を知る

私は、この生きる糧の3段活用に名前をつけてみようと思う。

【私の好物】

という代名詞を。

それは生きる糧となる3段活用。

私は常日頃、その事を頭を中心に置きながら生活しているといっても過言ではない。

常にセンサーを張り巡らせ、chanceを取りこぼさないように心掛けているのである。

chanceとは、思いがけないところに落ちているものだと思うから。

先日、ある夢の話をきっかけに、私は自分の、life styleの壁を打ち破り、新たな試みに挑戦してみようと考えてみた。

場所は、社内のトイレの中だった。

これは余談だが、トイレとは私にとって一番頭が働く場所。ものの数分の付き合いなのだが、その数分間の間に、右脳の普段使っていない部分が異常な活性化をみせるのだ。

今回のideaも、そんな数分間過ごしたトイレの中でうまれた。

普段の私の a f t e r 5 というのは、直帰で家ご飯。

脇目なんて一切振らない。

いかに長く家に籠る（こもる）事が出来るのかという事を、前日の私と毎日のように競っているのである。

正直、ここ最近の私は、このような生活に満足していたし、そんな環境に幸せを見出だしていた。

必然的に出会いのチャンスというのは無くなるのだが、それは不満に感じる程の話ではなかった。

だが、私の中枢神経は、私の気持ちとは裏腹に、主人の私を差し置いて、こつこつとストレスを溜めていたのだった。

私はその事に初めて気付いたのは、トイレでの話の4日前の事だった。

夢の中での話だった。

それは何の前触れもなく訪れたのだった。

「宮崎をおゝ、どげんかせんといかん」

.....。

.....？

英夫 東国原？

そう、今更ながら、私の夢の中に、あのフレーズとともに宮崎県知事が登場したのである。

私は、宮崎に縁なんてないし、ましてや県知事なんてもつての他。

夢の中が不思議な世界だということは分かっていたが、さすがにその日の目覚めには変な違和感を覚えていた。

私は普段から、夢の話には敏感だったので、その日に関してはより強く反応してしまった。

とはいえ、やはり夢。

時間の経過とともに、私の頭からもその情報は徐々に薄れていったのだった。

だがしかし、お昼を過ぎた時間帯。

仕事に没頭していた私の頭の中に、あのフレーズとともにあの知事が出てきたのである。

一度目はそれ程気にすることもなく、二度目は笑って許し、三度目には目を閉じ、指先で机を叩いていた。

四度目にはトイレに駆け込み、原因の追求と対策を考えていた。

このことが、一日を通して、定期的に私の頭の中でプレイバックされてしまっていたのである。

そして、その日の夜もあの夢を見て、次の日も同じように過ごすことになってしまったのだった。

明くる日も同じ。

またその次の日も同じ。

そんな事が続いていたのが原因で、一種のサブリミナル効果が発生し、とうとう私は刷り（すり）込まれてしまったのだった。

「山田 花子をおゝ、どげんとせんといかん」

と、いった具合に。

そして、このトイレの中での話に繋がるのである。

変化をもたらす。

それは今までになかったことへの挑戦。

ものは考えよう。

難しく考えれば難しくなり、簡単に考えれば簡単に思える。

ということ、私は簡単に考える方を選択したのだった。

l i f e s t y l e を変えるという事。

トイレを出る瞬間に私が考えたのは、外で過ごす時間を増やすということだった。

仕事を終えた私は、普段だったら家路を急ぐのだが、その日は外で食事を済ませることにしたのだ。

とはいっても、外での時間の過ごし方に対して不器用になってしまっていた私は、ただ歩いているだけで、これといった目的を定めることが出来ずにいた。

のらり、くらり。

目的もなく歩く私。

見慣れた風景だったと思っていたが、意識が違つと見える風景も変わってくる。

ビルの中にひっそと佇む（たたずむ）社^{やしろ}。

何屋なのか分からない深い紅^{べにいろ}色の扉。

自宅兼で営業している花屋。

新鮮だあ…。

なんて、自分の世界に浸っていた私ではあったが、そんな私の目に飛び込んできて、私の唾液線を刺激したのは、牛のマークでおなじみのどんぶり屋さん、『。。。家』だった。

自分の中でも違っつていう気持ちは明確だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8683o/>

肩重い『被験者、山田 花子の場合』

2010年11月12日20時57分発行